

上州ひと交差点

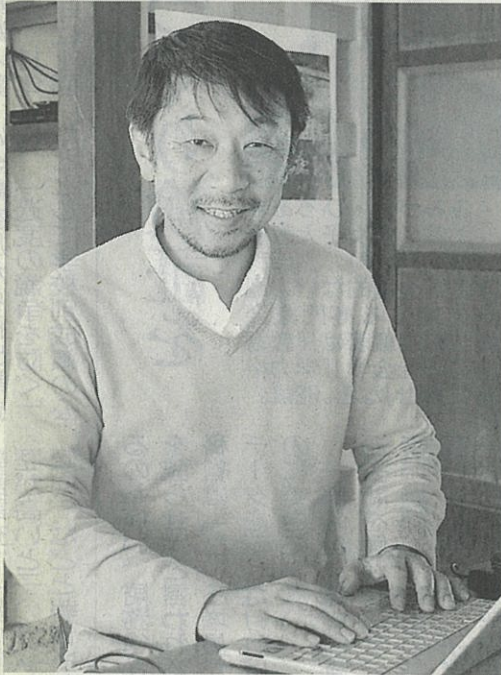
農業通じ「世界を元気に」

甘楽町を拠点に、青年海外協力隊や開発途上国からの研修生の農業実習を受け入れるNPO法人「自然塾寺子屋」の理事長を務める。国際協力を地元の子どもたち、農家との交流に結びつけ、「農村から、日本と世界を元気に」が信条だ。友人と2人で始めた地道な活動は今年6月、15年になる。

自身も協力隊員OBで、1999年から2年間、中米・パナマで過ごした。大学を卒業後、カナダや日本で旅行業、ホテルの営業担当などで働いたが、「さらに挑戦したい」と33歳で途上国支援の道に踏み出した。

派遣されたのは山間部の村。頼りにしていた男性たちは出稼ぎで少なく、残った女

甘楽町で国際協力15年 矢島 亮一さん (51)



性たちと主食の米・豆の生産と果樹栽培を組み合わせ、農業の活性化をめざした。

電気やガス、水道はないが、人々が仲良く助け合う暮らし。高崎での子ども時代を思い出す、懐かしい光景だった。

一方、日本から伝わってくるのは、未成年者が殺人を犯し

たというニュース。「先進国の日本で、なぜこんなことが起こるのか」。パナマでの経験を日本に伝えたいと思った。

2001年に帰国後、甘楽町の知り合いの紹介で町や農協の協力を得て、パナマからの研修生を受け入れた。以後、アジアやアフリカなどからの400人以上が同町で学んだ。03年からは派遣前の青年海外協力隊員に野菜栽培や給水技術などの指導も、独立行政法人国際協力機構(JICA)から任されている。甘楽町で研修を積み、海外へ出て行った隊員は600人以上、40カ国以上に広がっている。帰国後、同町や富岡市などへ転入する元隊員も10人以上を数える。

途上国からの研修生は、各国の官僚らエリートが多い。化学肥料を使い、商品の見た目を重視する日本農業の一面も見てもらい、地元農家の声を聞いてもらう。3月にはタンザニアからの研修生約10人と小・中学生が両国の歴史を学び合う場も設けた。「私たちが教える立場にはなく、日本の例を参考に、各国にあった農業を工夫してもらえほしい。子どもたちには多文化と交流する中で、地元の伝統文化に誇りをもってほしい」と話す。

話す。

(金井信義)